

(続紙1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	足立 真理
論文題目	現代インドネシアにおけるザカート (喜捨) 制度の革新とイスラーム的 社会福祉		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ムスリムの最重要義務行為の1つであり、イスラーム世界で長らく用いられてきた伝統的社会経済制度であるザカート (喜捨) を取り上げ、近年、東南アジアで取り組みが始まっているその新たな実践に着目したものである。とりわけ、先進的な取り組みが始まっているインドネシアの事例を取り上げ、その実態の解明とイスラーム経済論から見た意義を明らかにし、新たな社会福祉システムとしての可能性を考察することをめざした研究である。</p> <p>本論文は、5章から成り、序論と結論が付されている。</p> <p>第1章「イスラームにおけるザカート—社会・経済・政治—」では、関連する様々な研究領域 (貧困・社会発展論、イスラーム法学、イスラーム経済学) の先行研究を批判的にまとめ、ザカートを慈善の観点から捉えるこれまでの分析枠組みの限界を示し、ザカートの持つ社会福祉的側面に注目する新しい分析枠組みが提起されている。</p> <p>第2章「インドネシアにおけるザカートの歴史的位相」では、現代インドネシアにおけるザカートの沿革がまとめられている。そこでは、長らく個人の実践であったザカートが、イスラーム復興の盛り上がりとともに代替的社会福祉制度として注目が高まっていき、1990年代後半の民主化以降、国家による制度化が進んでいく動態およびそれに対するインドネシア社会の様々な対応 (コンフリクト、コーディネーション) が明らかにされている。</p> <p>第3章「イスラーム経済思想、実践の合流地点—インドネシア・ムスリム知識人のザカート議論—」では、インドネシアで現在実践されているザカートの先進的取り組みの理論的バックボーンとなったムスリム知識人たちの議論に焦点を当て、ザカートを社会における富の再分配装置として再定義したり、生産的ザカートという新概念を創出したりするような理論的・制度的革新がその先進的取り組みの背景にあることが解明されている。また、その革新の過程で議論されたイスラーム的な倫理、イスラーム的な社会的公正といった基礎概念の再検討は、イスラーム世界全体の思想潮流とも通底していることが明らかにされている。</p> <p>第4章「インドネシアにおけるザカート分配のパラダイム転換—伝統から創造へ—」では、ジャワ島東部のマラン市における臨地研究にもとづいたザカート実践の実態解明が行われている。そこでは、集められたザカートの用途について、従来から行われている貧者・困窮者等への直接的給付だけではなく、マクロ経済レベルでの貧困の削減や社会福祉の向上を目的とした教育や医療分野への投資 (奨学金給付や病院の建設</p>			

など)にも新たにザカートが用いられていることが明らかにされ、こうした変容を伝統的ザカート分配から創造的ザカート分配へのパラダイム転換と位置づけている。

第5章「インドネシアにおけるザカート分配のパラダイム転換—消費から生産へ—」では、前章と同じくマラン市における現地調査にもとづいて、ザカートをマイクロファイナンスとして活用する新たな取り組みが明らかにされている。そこでは、従来ザカートの支給対象ではなかった中間層の人々が、マイクロファイナンスという形でザカート資金を事業等に利用していることが具体的調査データによって解明されている。

結論では、論文全体をまとめ、インドネシアにおけるザカートの実践が、国家に依らない新たな社会福祉システムとして機能し始めていることを指摘し、それが単にインドネシアの文脈だけでなく、イスラームの理念にもとづいた新たな社会福祉システムのグローバルな先進事例としての意義もあると総括されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、イスラーム世界論の一環として、現代イスラーム経済の新たな実践領域である伝統的イスラーム社会経済制度の再活性化に着目し、インドネシアにおけるザカート(喜捨)を具体的事例として、その実態を綿密な臨地研究によって解明し、その実践の意義をイスラーム経済論の視角から評価したものである。

本論文の内容に即した近年のイスラーム経済論における主要な論点は3つある。第1は、イスラーム経済の社会的役割に関する議論である。現代イスラーム経済は、世界経済の一翼を担うほど飛躍的に発展したが、その発展は特定の産業(金融、食品)に大きく依存しており、その発展の恩恵を社会的弱者が十分に享受できていないことが指摘されている。こうした批判にもとづいて、イスラーム経済はより社会に根を下ろした実践を重視すべきだという議論が行われている。

第2は、伝統的イスラーム社会経済制度の再生に関する議論である。近代以降のイスラーム世界では、近代化・西洋化によって、それまで用いられていた様々な独自の社会経済制度が廃れてしまった。しかし、それらの制度の有用性をもう一度見直し、現在の経済格差や貧困の問題を解決する手段として、こうした伝統的な社会経済制度をもう一度活用すべきではないかという議論が行われている。

第3は、インドネシアのイスラーム経済実践の評価に関する議論である。現代のイスラーム経済は、中東湾岸地域とマレーシアが牽引役として発展してきた。その中で、インドネシアは後発組であり、同国のイスラーム経済実践のほとんどは隣国マレーシアの影響下にあると考えられてきた。しかし、近年のインドネシアにおけるイスラーム経済の発展に伴って、インドネシア独自のイスラーム経済の発展モデルのあり方が議論されるようになってきている。

本論文の価値は、こうした近年のイスラーム経済論で交わされている議論を批判的に検討した上で、インドネシアにおけるザカート実践の新たな取り組みという具体的事例の考察によって、イスラーム経済論の新たな方向性を指し示した点にある。

本論文の学術的な意義は、以下の3点にまとめることができる。

第1は、イスラーム経済の社会的役割を重視するという近年の研究潮流の文脈において、その先進的取り組みとしてザカートの新実践に着目し、その実態をインドネシアにおける綿密な臨地研究によって明らかにした点である。本論文が取り上げたザカートの新実践の具体的事例からは、教育や医療への投資といったこれまでにないザカート資金の活用のされ方が明らかにされている。イスラーム経済の社会的役割を重視する議論の多くは、理論研究に終始しがちであるが、本論文による事例研究はそうした議論に対して具体的な実証的根拠を与えており、本論文の貢献は非常に大きい。

第2は、伝統的なイスラーム社会経済制度が、なぜ、現在の経済格差や貧困の問題を

解決する手段になりえたのかを実証的に明らかにした点である。従来の研究では、近代以前から連綿と続けられているザカート実践のあり方に素直に立ち返ることこそが、経済格差や貧困の問題の解決に資すると考えられてきた。これに対して、インドネシアのザカートの新実践の実態を解明した本論文では、ザカートを社会における富の再分配装置として再定義したり、生産的ザカートという新概念を創出したりするような理論的・制度的革新があって初めて、ザカートの経済格差や貧困問題への貢献が可能となることを実証的に論じている。伝統的なイスラーム経済実践に立ち返りさえすれば現代社会の抱える諸問題は解決しえるという楽観的な従来の議論とは対照的に、現代に有効な制度の再生には多くの思想的・理論的再構築の営為が必要であるという本論文の主張は、綿密かつ包括的な実態の観察にもとづくきわめて信頼のできる主張だと大きく評価できる。

第3は、インドネシアのイスラーム経済実践に対して、新たな視点からその独自性を評価した点である。近年のイスラーム経済論でさかんに議論されているインドネシア独自のイスラーム経済の発展モデルについては、国家主導型のマレーシア、大企業主導型の中東湾岸地域と対比した草の根型として位置づける研究が大半を占めている。たしかに、インドネシアのイスラーム経済実践の多くは、零細の金融機関やザカート組織によって支えられている。これに対して本論文は、こうした草の根型のイスラーム経済実践をインドネシアの独自性の1つと認めながらも、国家主導によるイスラーム経済実践にも一定のプレゼンスがあることを実証的に示し、両者のコンフリクトやコーディネーションが織りなすダイナミズムこそが、インドネシアのイスラーム経済発展モデルの大きな独自性であると論じている。これは、インドネシアのイスラーム経済実践に対する独創的な評価である。

本論文は、以上のようにイスラーム世界論とイスラーム経済論に大きな貢献をなすのみならず、インドネシア研究や社会福祉論にとっても貴重な貢献をなすものと考えられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。